

## 4

# 横浜市における 国際園芸博覧会の計画（案） について

## （1）基本的事項

### ① 開催場所

旧上瀬谷通信施設（横浜市）



図 旧上瀬谷通信施設位置



図 博覧会会場位置

資料：横浜市提供

## ② 開催期間

2027年3月～9月（6か月間）

## ③ 会場規模

80ha～100haを想定

## ④ 入場者規模

1500万人以上を想定

## ⑤ 開催組織

国が認定する法人等

## ⑥ 開催事業費

会場運営費

320億円～360億円程度（会場面積80～100haとした場合）

会場建設費

190億円～240億円程度（会場面積80～100haとした場合）

関連公共事業費

600億円程度

## (2) 基本構想案及びテーマについて

横浜市が2018年3月に作成した「旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会 基本構想案」は、①基本理念として、横浜・上瀬谷で花と緑等をシンボルに、地球環境の持続、経済成長、成熟社会等を展望した未来志向の国際園芸博覧会を開催することとしている。続いて、②国際的な視点、花と緑・博覧会の視点、国内的の視点、という大きく3つの視点から開催する意義を整理しており、続けて、③テーマ、④事業コンセプトやコンテンツなどの事業展開の考え方、⑤会場構成・環境共生、輸送・宿泊計画、地域整備の方向性、開催経費、経済波及効果等の事業構成、という形で整理されている。AIPH や BIE が求めている博覧会に必要な基本的な考え方を網羅しており、テーマに、「幸せを創る明日の風景」を掲げている。

### <SDGs 達成の体現>

現在の世界は、SDGs を共有し、2030 年を年限に、その達成を目指しており、我が国は、世界に対して日本の「SDGs モデル」を示すことを掲げている。博覧会は人類の活動の将来の展望を示すものであり、政府が関与して、今日に開催する博覧会は、SDGs が達成された風景を示し、2030 年の目標年次、さらにはその先の社会に向けて、人類が進むべき方向性を探る場となるものである。

「幸せを創る明日の風景」をテーマとする国際園芸博覧会は、花や緑、農とそれに伴う人々のふれあいを通じて、人類の幸福を模索し、文化の継承やその達成に向けた人々の取組とともに、SDGs の達成を具体的かつ社会的なランドスケープとして明らかにするものである。

### <科学技術と人間性の調和>

Society5.0 にみられるように、情報通信技術の発展は社会に大きな変革をもたらし、快適で質の高い生活の提供を可能にするものである。また、第5次産業革命とも言われている科学技術と生物資源が融合した新たな技術・産業領域の創出も期待されているところである。こうした科学技術の発展は、社会に多くの貢献を果たすと同時に、人間の精神・身体に負荷となる新たな

影響をもたらしている。

国内外の企業が就業環境にバイオフィリックデザインとして緑を取り入れ、あるいは自然豊かな都市への立地を指向する動きは、現代社会がもたらす様々な負荷となる影響を、花や緑といった自然との共生によって軽減し、生産性や創造性の向上等を目指そうとするものである。

これからの中華は、科学技術のもたらす新しい価値を十分に活かすとともに、自然との共生による精神的・身体的な回復を持続し、科学技術と人間らしさを融合させた社会・文化を形成するものであり、我が国にはその先導的な役割が期待される。

豊かさの量から質を求める社会への転換は、科学技術の恩恵を十分に受けながらも人間性の回復と持続へも重きおくものであり、コンセプトの一つに挙げている普遍性と先進性からも、花と緑を主題として先進的な科学技術も活用して環境との共生を進める園芸博覧会の特性を十分に発揮させるものである。

#### <花と緑を通じた友好と平和>

横浜は、日本の開港期において、花や緑を通じた貿易により、諸外国と交流を深めた国際都市としての歴史を有し、また、戦後の1954年頃からは、日本庭園に見られる灯籠に「友好と平和の灯を点てる」(ピースランタン)と刻み世界各地に寄贈したという国際園芸博覧会に通じる長い国際交流の礎を築いている。

横浜市は、開催場所を旧上瀬谷通信施設としており、当該地域は、平安時代には米づくり等が営まれ、栄えてきた地域であったが、昭和初期から通信施設として土地利用に制約を受けてきた。

横浜市における国際園芸博覧会は、2015年に日本政府に返還されたこの基地跡地において、世界各国の参画により花と緑の祭典として行われるものであり、SDGsの実現された姿として平和で持続可能な人類の将来と我が国の貢献を示す場となる。

これらのことから、横浜市が示す基本構想案、特に日本・横浜が創る明日の豊かさを深める環境社会を意図した「幸せを創る明日の風景」というテーマは、国が関与して開催する国際園芸博覧会として適当と考えられる。

＜「旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案＜答申＞」が示すテーマ＞

#### メインテーマ



#### テーマの意図

##### 日本・横浜が創る明日の豊かさを深める環境社会

花や緑は、理念や世代、国境を超えて人々に感動や笑顔をもたらす。花や緑は生命を通して過去と未来、人と人をつなぐ。それゆえに未来と希望が重なる。

地球規模の危機と山積する課題に行き詰まる世界が進むべき方向は、豊かさの再定義による質的成熟社会への転換にあり、誰もが取り残されない社会に向けて、経済的な豊かさを主体とした対比的な充足から、自然との共生や時間・空間を含めたシェアやつながりがもたらす幸福感を深めてゆくことが重要になる。それぞれが心に幸福感を深めるという種を自らの意思で蒔き、人や環境との関わりの中で育み、生命力にあふれ個性豊かに多彩な花を咲かせる、それが豊かさを深める社会の風景である。

心の豊かさを深める感性・価値観を「幸せーハピネス」、四季の移り変わり、大地の力強さ等、空間・環境・時間が織りなす「風景」に、次世代につなぐことや未来を創造する輝き・躍動の「明日」を重ね、花と緑はそのシンボルである。

花や緑は、自然との共生、芽吹きの力強さと繊細さ、溢れる笑み、平和や安らぎ、人との分かち合い・つながりや感動などの象徴である。

花や緑、農が本来的に有する循環の原理、育みや恵みの価値体験、人類がその歴史の中で培ってきた文化的側面、精神的効用を再認識し、無限にはなり得ない地球の環境容量を背景に、その今日的効果を国際園芸博覧会という参加体験による実証の場を通して世界に問いかけることは、新たな価値観・産業領域の創出等とあいまって、国際的な課題の解決や未来社会の展望に新しい視点を与え、進展に大きく寄与するものと考える。

また、我が国が自然への敬意や畏怖を根底におきながら培ってきた自然と共生する思想を礎に、水循環や防災減災、産業や雇用、教育や遊び、市民参加など社会システムも含んだ持続的な社会的共通資本としてのグリーンインフラがもたらす風景や新たな価値は、横浜・上瀬谷が持つ明日への展望、平和のメッセージや市民力とあいまって、豊かさの質を深める持続可能な未来の環境社会に新たな価値をもたらすものと確信する。

### (3) 事業展開等について

事業展開等については、本検討会においても博覧会について様々な意見・提案をいただいた。

引き続き横浜市において、開催までのプロセスを含め、自分から主体的に取り組むべき自己ごととして具体的な検討が進められるが、例えば以下の視点等に留意して検討を進めることが求められる。

- ・SDGs 等の世界的な課題について世界とともにに対応していく立ち位置
- ・地域経済を超えた、国全体の経済の活性化・文化の発展
- ・環境の変化に対する、ライフスタイルを含めた生命としての人間の対応
- ・生物多様性や地球規模の環境保全の具体的体感
- ・人と人の出会いの創出、効率化や均質化とは異なる価値観の提示
- ・環境に負荷を掛けずに文化を営むというときにスポーツの果たす役割
- ・花や緑との関わりを考えることを通じた人間の幸せの追求
- ・市民参加による成熟した園芸文化の発信
- ・都市の中での農業とコミュニティが融合した新しいモデルの創出
- ・日本の里山や風景というような日本の原風景や知恵の発信
- ・中山間地域等地方の現状も踏まえた農の発展
- ・国内外に向けた事前のコミュニケーションの作り込み
- ・ツーリズムの観点からの体感とユニバーサルデザイン
- ・博覧会における新しいモビリティの活用
- ・博覧会場と周辺地域の連携
- ・首都圏をはじめとした関係自治体の巻き込み
- ・博覧会開催までの間の旧上瀬谷通信施設の土地の有効活用

なお、博覧会の会期が半年間と限られることから、開催までのプロセスも会期中と同様に重要であり、事前準備段階からの戦略的な情報発信、市民参画の推進とコミュニティの醸成等に努める必要がある。

以下、本報告書中の破線囲み内は、横浜市の現在の検討状況を示すものである。

## ■基本的考え方

現代に生きるわたしたちは、地球温暖化や途上国における人口増加、人口増加による食料問題、自然資源の過剰利用、生態系サービスの減少、生物多様性の喪失等の地球規模の環境変化や、国内における人口減少の進展、急速な高齢化や長寿命化、コミュニティの喪失、自然災害の激甚化・頻発化、中山間地域の山林や農地等の荒廃、テクノストレスの増加などの山積する課題を克服するとともに、AI・IoT 等の新技術の進展や遺伝子レベルでの技術の進化、経済のグローバル化、地球規模での人的交流の活性化など技術革新と経済のグローバル化への対応が求められている。このような社会的大変容へ対応し、次世代の子供たちのために、将来にわたり「幸せな明日」を継承していかなければならない。

そのためには、自然資源の大量消費やエネルギーの浪費などに支えられたこれまでの「豊かさの量的拡大を求める社会」から「豊かさの質を深める社会」、つまり持続可能な環境社会に転換する必要がある。

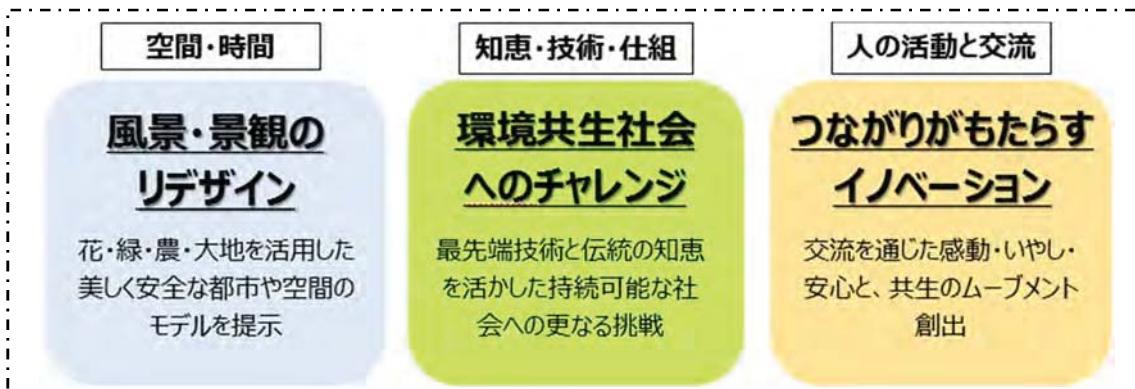
国際園芸博覧会を通して目指す「豊かさの質を深める社会」とは、「自然と共生した環境負荷の少ない持続可能な社会」「花・緑・農などの自然が身近にあふれた美しく安全な社会」「分かち合いとつながりのある、心豊かで健やかな社会」であり、このような社会が「幸せを創る明日の風景」につながるものである。

横浜市における国際園芸博覧会では、SDGs の達成や Society5.0 の実現をはじめ、さらに、その先の社会(2050 年)に向け、バックキャストの視点を持って、グリーンインフラの多様な機能を活かし、課題解決の方法や社会のあり方などを提案するとともに、豊かさの質を深めて「幸せを創る」ための行動を、すべての人が「開催までのプロセスを含め、自ら主体的に取り組むべき自分ごと」(ジブンゴト)として認識し、自らの行動を変え、さらには社会の仕組みを変える契機としていく。

加えて、国内外の多様な人や企業、技術や感性が集い、出会い、交流する場として、新たな可能性や価値が生まれる博覧会を目指す。

## ■事業コンセプト（シーン展開の方向性）

「豊かさの質を深めて幸せを創る」ための行動を主体的に行う人、企業、コミュニティを増やすとともに、課題を解決し、社会のあり方を変えるために、国際園芸博覧会においては、メインテーマ「幸せを創る明日の風景」について、風景を形成する要素である「空間・時間」「知恵・技術・仕組」「人の活動と交流」に着目した 3 つの方向により会場内に様々なシーン(コンテンツ)を展開。



#### 《風景・景観のリデザイン（※）》

##### ◇ 都市と緑・農が融合した次世代都市モデル

会場全体を、グリーンインフラを基盤としたひとつの「まち」と捉えて、花や緑・農を媒介として、自然の機能を発揮する心地よい空間を次世代都市モデルとして展開とともに、その機能や効果を可視化して展示。

##### ◇ 世界の多様な地域・園芸文化へのいざない

日本古来の園芸文化（生け花、盆栽、園芸植物、江戸園芸等）や日本庭園（庭園文化）、世界各地の多様なライフスタイルガーデン等を展示し、多様な園芸文化・庭園文化の魅力を発信。※社会の質的成熟と環境共生が求められる中にあって、Society5.0やグリーンインフラといった新しい概念や技術を取り入れながら、「まち」と「自然」を融合させて最適化することを「リデザイン」と表現

#### 《環境共生社会へのチャレンジ》

##### ◇ 自然の機能を活かす最先端の知恵と技術

IoT や AI 等を活用した生産性が高く環境負荷の少ない農業生産技術、バイオマスを活用した物質生産・エネルギー生産技術等を提示し発信。

##### ◇ 環境負荷の低減と利便性を両立する暮らしの知恵と技術

ゼロエミッション、ゼロカーボン、食品ロスゼロ等を実現するための知恵や最先端の技術・仕組み、また人間が古来培ってきた自然と共生しつつ快適に暮らす知恵や技術に改めて価値を見出し、積極的に活かすことで、エコ（サステナブル）なライフスタイルの実現や、質的な充実、心の満足度の向上に資することを提示し発信。

#### 《つながりがもたらすイノベーション》

##### ◇ 花・緑・農・食が拓く心豊かで健やかな生活

花・緑・農に触れ、また、食や野遊び、アートなども実際に体験しながら、花・緑・農・食とのつながりや、これらがもたらす「安らぎ・癒し」「喜び」「楽しさ」、心にもたらされる「充足感」「豊かさ」を実感させるとともに、教育、医療、福祉、芸術等への花・緑・農・食の領域を拡大することにより生まれる「新たな価値」や「サービス」を提示。

##### ◇ 時間と空間をシェアする喜びと友好平和の共生社会

準備段階から、子どもたちをはじめとして、国内外の多様な市民、企業の参加と協働を得て、「みんなでつくる・つくり育てる」博覧会とするとともに、国内外から多様な人や企業が訪れる機会として、来場者、出展者、企画・運営を行う関係者やボランティアなど、様々な立場でかかわる人々が、時間と空間、国際園芸博覧会のメッセージを共有。

横浜での国際園芸博覧会が「ハブ」となり、日本各地の観光資源等を活用したツーリズムや、異業種や国際交流による新たなビジネスチャンスの拡大、産業振興につながるよう事業展開を工夫。

3つの方向を踏まえつつ、日本・横浜・上瀬谷の魅力と活力を発信する要素「花・緑・農・食・大地・交流」を組み合わせて最大限に生かし、「幸せを創る明日の風景」につながるさまざまなシーン(コンテンツ)を、来場者が気づきを得て、楽しめる内容となり、心に残る出会い、感動、体験、学びを提供できるように展開。

### ■会場構成

固定的なゾーニングによらず、土地・地形、水系、緑地、施設、活動等といった多様な要素を重ねることで会場内に様々な景(Scenery)を展開し、重層的かつ動態的な会場を構築する。加えて、日本の空間づくりの思想と技術を重視し、日本庭園の手法を活用していくことで、現況の地形や環境を活かした魅力的で個性的な空間となるよう会場の配置を検討。

#### 《エントランス・主要動線の設定（イメージ）》

新たな交通及び駐車場からのアクセスを想定し、2か所のエントランス(メインゲート)を設置。会場内の主要動線は、観覧動線の明快さと会場展示を順序立てて体験することを重視するため回遊式とし、園内モビリティ等による快適な場内輸送も併せて検討。



### 《主要施設の配置（イメージ）》

谷戸地形の相沢川をはじめとした既存の地形や水系、植生、会場周辺の景観や土地利用（瀬谷市民の森、農地等）を活かしつつ、ゲートの位置、博覧会後の公園計画等を考慮し、国際園芸博覧会として必要となる催事スペース、パビリオン等の主要施設を配置。

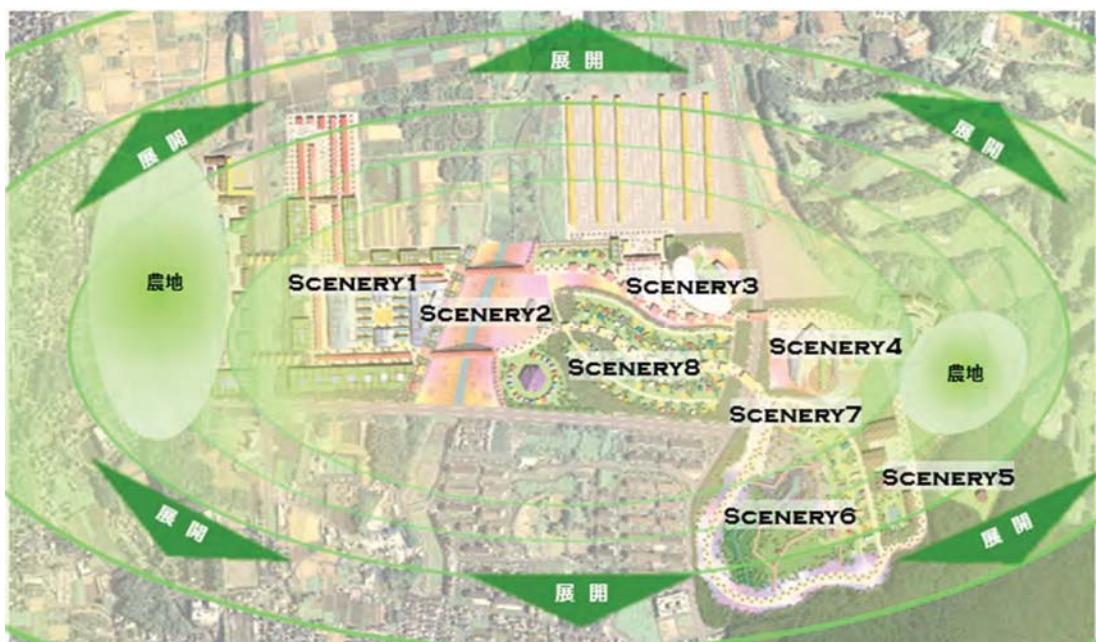
なお、会場の施設整備に当たっては、周辺の景観や環境との調和に配慮し、博覧会の終了後も存置する建築物等については、長期に渡り地域のシンボルとなることから特に、使用する素材・工法を厳選し、シンボルとして相応しいデザインを採用。



### 《会場展開の考え方（イメージ）》

会場全体にグリーンインフラの持つ多様な機能を取り入れ、環境と共生した祝祭の場とともに、日本庭園の技法により日本らしさを表現。

土地・地形、水系、緑地、施設、活動等といった多様な要素を重ね合わせることで生まれる様々な景（Scenery）において、様々なシーン（コンテンツ）を展開し、来場者に多くの出会い、感動、五感による体験、学びを提供できるよう会場を形成。会場外の農地との連携等、周辺地域へ展開。



<b>SCENERY 1</b> 自然の機能をいかした 知恵と技術	<b>SCENERY 2</b> 豊かな緑の中での アウトドアライフ	<b>SCENERY 3</b> 多文化交流の 祝祭ステージ	<b>SCENERY 4</b> 新たなライフスタイル
<b>SCENERY 5</b> 温故知新・日本の 園芸文化と庭園文化	<b>SCENERY 6</b> 環境と調和した ガーデン＆アート	<b>SCENERY 7</b> 日本ガーデンツーリズム 探訪	<b>SCENERY 8</b> 世界のガーデン ショウケース

## ■各景(Scenery)での展開イメージ

それぞれの景を体現していく具体的なシーン(コンテンツ)を検討中。

<シーン(コンテンツ)のイメージ>

Scenery1	Scenery2
<b>自然の機能をいかした知恵と技術</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 最先端の花緑の環境技術・研究・社会実験等の展示</li> <li>● 最新の花緑とふれあえるマーケットストリート等賑わいと活気あふれる空間           <ul style="list-style-type: none"> <li>・自然環境を模したドーム型植物園</li> <li>・未来植物工場や宇宙時代の栽培技術</li> <li>・スマート農業(AI、ICT等)</li> <li>・最新バイオテクノロジー、品種改良技術の紹介</li> <li>・空中大花壇</li> <li>・フラワーマーケットストリートなど</li> </ul> </li> </ul>   	<b>豊かな緑の中でのアウトドアライフ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 谷戸地形を活かした緑豊かな環境の中で様々なアウトドアライフ(食、遊び、スポーツ、読書、アート、ワークショップ等)を体験</li> <li>・シンボルガーデン(相沢川谷戸ガーデン)</li> <li>・キッズガーデン</li> <li>・ピクニックガーデン</li> <li>・アート・クラフト系ワークショップ</li> <li>・森のようちえん</li> <li>・プレイパークなど</li> </ul>   
<b>多文化交流の祝祭ステージ</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 日本と世界の文化・芸術の交流拠点としての催事空間</li> <li>● 微地形を活かした屋外劇場を整備、自然を体感できるランドスケープ           <ul style="list-style-type: none"> <li>・公式式典</li> <li>・コンサート、演劇、市民イベント</li> <li>・市民団体の全国大会・フォーラム等の開催</li> <li>・ナショナルデー式典</li> <li>・国内外の市民、企業、団体との交流</li> <li>・企業等の活動披露</li> <li>など</li> </ul> </li> </ul>  	<b>新たなライフスタイル</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 既存の里山の環境を活用した次世代の都市モデル、生活、技術の融合した、次世代の暮らしの未来像を提案</li> <li>● 地域の方々と連携した農の展示           <ul style="list-style-type: none"> <li>・次世代都市モデルタウン</li> <li>・ヒーリングセンター(農を利用した園芸療法等の体験等)</li> <li>・ソーシャルファーム(農福連携)</li> <li>・地産地消レストラン</li> <li>・ソーラーシェアリング</li> <li>・農体験(収穫体験等)</li> <li>・農を支える生活スタイル</li> <li>・近未来の農のある生活</li> <li>・横浜館、横浜出展花壇(花苗の生産・新品種の普及等)・エディブルガーデンなど</li> </ul> </li> </ul>  

## <シーン(コンテンツ)のイメージ>

### Scenery 5

#### 温故知新・日本の園芸文化と庭園文化

- 横浜国芸博のHost Gardenとして日本にしえの園芸文化と庭園文化を振り返る、未来の園芸文化へのメッセージを発信
  - ・日本政府館（盆栽、生け花、浮世絵、国内最新園芸植物、全国のツーリズム（グリーン・アグリ・エコ等）の紹介 等）
  - ・迎賓館
  - ・日本庭園（草道、茶道体験等）
  - ・VRでの森林、里山体験
  - ・日本の伝統的な自然のいいものの技術・知識の展示
  - ・造園技術の実演 など



### Scenery 6

#### 環境と調和したガーデン&アート

- 緩やかな起伏の広がる環境を活かしたナチュラルガーデン
- 世界のトップガーデンデザイナーとアーティストがコラボレートし、創造的な花の景観と伸びやかな草地を堪能できるランドスケープを展開
  - ・感動を呼ぶ大花壇
  - ・アースアート
  - ・AR技術等を活用した仮想体験
  - ・体験する花壇（花のスイーツ、香水調整等、シャブラン等）
  - ・市民と共にくるナチュラリストガーデン、種だんご花壇 など



### Scenery 7

#### 日本ガーデンツーリズム探訪

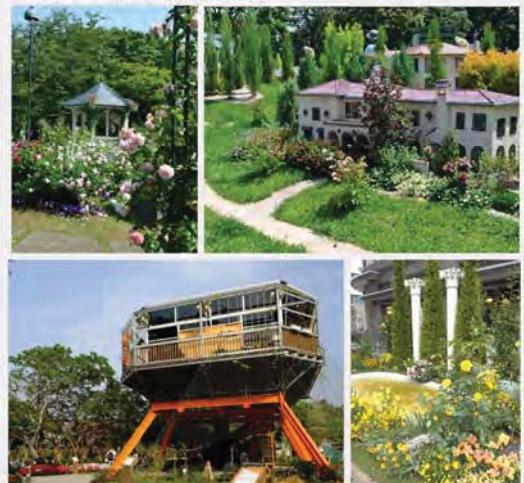
- 北から南の変化に富んだ日本の豊かな環境を体感できる国内出展エリア
- 観光立国の象徴としてのJAPANガーデンツーリズムを凝縮したランドスケープ
  - ・国内出展庭園（官民共同出展）
  - ・全国のガーデンツーリズムの紹介
  - ・VR等を活用した日本全国の花の名所鑑賞 など



### Scenery 8

#### 世界のガーデンショウケース

- 世界各国が提案するライフスタイルに出会える国際出展庭園エリア
- 世界の各国が提案する次世代のアウトドアリビングや伝統的な庭園を巡る
  - ・国際出展庭園（展示館）
  - ・ワールドマルシェ
  - ・世界の食が楽しめるレストラン
  - ・世界の庭園コンテスト
  - ・世界から造園技術者を集めた研修会 など



## (4) 国際園芸博覧会を開催するための基盤について

### <将来のまちづくりを見据えた基盤整備>

旧上瀬谷通信施設においては、横浜市は旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（素案）を作成し、地権者の意向も踏まえ、農業振興ゾーン、観光・賑わいゾーン、物流ゾーン、公園・防災ゾーンに区分している。まちづくりの実現手法として、市では市施行の土地区画整理事業を行い、あわせて土地利用の展開に伴い発生が想定される交通需要に対応する新たな交通の導入や、東名高速道路や保土ヶ谷バイパス等の幹線道路の近接性を生かした道路アクセスの強化、地区内の道路ネットワークの整備を図ることとしている。博覧会場は、公園・防災ゾーンおよび観光・賑わいゾーンに位置することとなるが、公園・防災ゾーンに国際園芸博覧会のレガシーを継承する公園や災害時における広域防災拠点を形成することとしている。そのため、土地区画整理事業において国有地を博覧会予定地に集約して博覧会用地の確保を行うこととし、整備される都市公園の設計と博覧会の会場計画を一体で検討し、恒久的な園路・広場や植栽等を都市公園事業で実施することとしている。

博覧会の輸送計画については、近接する相鉄線瀬谷駅からの新たな交通（中量軌道等）の導入を含めた多様な交通手段の検討を行うこととしており、自家用車についても会場内外に必要な駐車場を確保することとともに、主要経路の道路拡幅や、区画整理区域内の道路整備を行うこと等により、分散型の輸送計画により博覧会を支える交通も確保できるとしている。

このような優れた立地環境や、関連計画の現時点での検討状況から、旧上瀬谷通信施設は開催地として十分なポテンシャルを有しており、横浜市においてこれら基盤整備をスケジュールに従って着実に実施することによりはじめて実現が可能となるものであるが、その準備状況は現段階として妥当であると考える。一方で、例えば輸送計画における駐車場確保予定地や周辺道路の交通容量の分析評価等、今後さらに詳細な分析評価が必要な課題については、横浜市において引き続き検討することが妥当である。

また、旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（素案）によると、地区全体として環境と共生した郊外部の新たな活性化拠点の形成を実現するとしており、

周辺に存在する瀬谷市民の森等の貴重な自然環境との共生とともに、地区全体の価値の向上を周辺市町村等にも波及させていくという周辺地域との共生にも留意する必要がある。

このため、周辺道路の交通容量や地域の環境への影響も考慮し、交通需要の分散化と交通手段の最適化を図るとともに、期間中の来場者の計画的な分算、来場前後の適切な情報提供、会場計画と滞留者のバランス、夜間も含めた戦略的な事業規模や運営についても引き続き検討するべきである。

#### <博覧会のレガシーの継承>

旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（素案）によると、農業振興ゾーンにおいて農産物の収穫体験や滞在しながらの農体験、ICT 等を活用した質の高い農産物の安定生産による「収益性の高い農業」の展開、大学と連携した農業技術の研究等、他の地域へも波及する新たな都市農業モデルとなる拠点を形成することや、公園・防災ゾーンにおける博覧会のレガシーを継承する公園整備、また全体の基盤整備として多様な機能を持つグリーンインフラの活用等を行い、開催後地区全体でそのレガシーを継承・発展していくこととしている。

リオデジャネイロで開催された地球サミットにおいて生物多様性と気候変動という地球環境における重要課題への提示が行われたように、この国際園芸博覧会においても、空間としてのレガシーに加え、国際園芸博覧会を通して SDGs の実現された社会の有り様等を示すものであることを踏まえ、例えば自然資本財の保全と活用等にかかる幅広いステークホルダーによる参画と議論により、国際的な指針や提言を共有・発信していくことが求められる。

また、博覧会終了後の地区内外のまちづくりにおいても上瀬谷の特性を生かしつつ、AIPH が掲げるグリーンシティの概念等も踏まえつつ、快適でユニバーサルデザインに配慮された計画、美しくバイオフィリックな景観デザインのビジョン、さらには統一的に適用される環境共生のガイドライン等を通して継承し、横浜市の先導的なまちづくりとして、国内外に発信していくことが求められる。

## ■地域整備の方向性

《旧上瀬谷通信施設土地利用基本計画（素案）<sup>(※)</sup>の骨子》

※令和2年1月15日から2月14日まで市民意見募集を実施。3月末までに基本計画を策定予定。

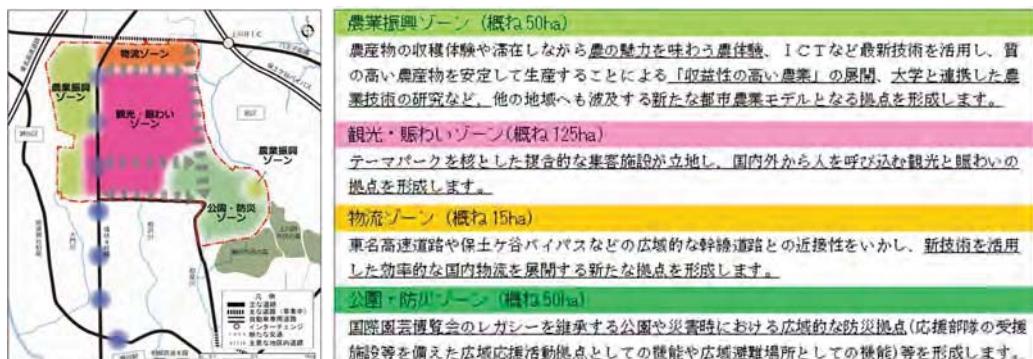
- ・地区の特性や横浜市を取り巻く状況、市の上位計画等を踏まえ、豊かな自然環境をいかした「郊外部の新たな活性化拠点を形成」することで、「みらいまで広げるヒト・モノ・コトの行き交うまち」を目指していくことをテーマとし、3つの方針を位置付け。

### テーマ 郊外部の新たな活性化拠点の形成 ～みらいまで広げるヒト・モノ・コトの行き交うまち～

【方針1】 多様な交流による、 賑わいと活気のあるまち	【方針2】 活力ある都市農業と緑を いかした魅力あるまち	【方針3】 将来にわたり、安全安心 で、利便性の高いまち
<ul style="list-style-type: none"><li>① 集客機能の導入による、 交流人口の増加</li><li>② 交通利便性をいかした、 企業などの立地による 経済活性化</li><li>③ 周辺施設と連携した、農業 の展開による地域活性化</li><li>④ レクリエーションの場の 創出</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>① 賑わいと食・農業の連携 による新たな都市農業の 展開</li><li>② 都市農業を支える 生産基盤の整備</li><li>③ 緑の空間の保全と創出</li><li>④ グリーンインフラの活用</li><li>⑤ 国際園芸博覧会のレガシー を継承する拠点の形成</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>① 地域や広域レベルでの 災害対応力の強化</li><li>② グリーンインフラも活用 した防災・減災対策の推進</li><li>③ 道路アクセスの強化と地区内 の道路ネットワークの形成</li><li>④ 新たな交通の導入</li><li>⑤ 将来想定される課題への 対応 (医療、福祉、公園型墓園等を検討)</li></ul>

- ・まちづくりのコンセプトとまちづくり協議会が検討を進めてきた内容を踏まえ、「農業振興ゾーン」「観光・賑わいゾーン」「物流ゾーン」「公園・防災ゾーン」の4つのゾーンを配置。

<土地利用ゾーン>



- ・各ゾーンが連携することにより、人やものが行き交い、将来的には年間1,500万人が訪れ、地区全体の価値が向上するとともに、周辺地域へも波及していくことで、環境と共生した郊外部の新たな活性化拠点の形成の実現を推進。
- ・国際園芸博覧会閉会後の土地利用にあたっては、地区全体でそのレガシーを継承・発展。

## 《旧上瀬谷通信施設の土地利用と国際園芸博覧会の関係（イメージ）》



### ■国際園芸博覧会の会場用地の確保の考え方

旧上瀬谷通信施設の土地利用においては、国有地・民有地の混在を解消するとともに、農業振興と都市的土地利用を行う土地を集約し、農業基盤や道路などの都市基盤の整備を一体的に推進するため、地区全域で市が施行者となる土地区画整理事業を実施することを前提に検討。

国際園芸博覧会の会場用地については、土地区画整理事業を活用して国有地を集約すること等により、閉会後に都市公園となる区域を含む 80ha～100ha を確保するとともに、仮換地指定前に土地所有者から工事着手の同意（起工承諾）を得る手法等を活用し、早期に土地区画整理事業及び都市公園事業による基盤整備工事に着手することにより、国際園芸博覧会の会場整備に必要な工事期間を十分に確保。

### ■輸送計画について

#### 《輸送計画の基本的な考え方》

幹線道路と近接し、かつ複数の鉄道路線に囲まれた立地特性を活かして、会場へのアクセスがひとつのルートに集中することがないよう、多方面に分散。

#### 《来場者予測シミュレーション（令和元年度）》

- ・来場者数を 1,500 万人（国内 1,425 万人、国外 75 万人）と設定し、会場位置、開催期間、開場時間等の諸条件をもとに、過去に開催された博覧会の実績データ等からシミュレーションを実施。
- ・輸送計画の基準となる「1 日当たりの想定来場者数（計画日来場者数）」については、他の国際博覧会の考え方を参考に、会期における来場者数上位 10% の日の平均値を算出して設定（約 15 万 6 千人）。その上で、来場者が利用する交通手段、入退場の時間帯、会場内における滞留時間等を勘案して輸送計画を検討。

### 《輸送計画（素案）の概要》

- ・上記シミュレーション結果を踏まえた輸送計画（素案）の概要は、以下のとおり。

交通手段 (割合)	計画日来場者数への対応	左記を超える日への追加対応
自家用車 (約43%)	・会場近接地に駐車場を確保 ・パーク・アンド・ライドの導入	・自家用車抑制・平準化策 (駐車場料金設定、予約制導入等) ・駐車スペースの確保 (大規模商業施設との連携等)
団体バス (約16%)	・会場近接地に乗降用のバスペイを設置	
公共交通機関 (約40%)	・相鉄線瀬谷駅から新たな交通を運行 ・各鉄道路線最寄り駅等からシャトルバスを運行	・シャトルバスの増便等
その他(徒歩・二輪) (約1%)	・駐輪場の整備等	

- ・輸送の円滑化のため、将来の土地利用計画と整合を図りながら、環境負荷の低減等も考慮しつつ、交通混雑緩和のための道路機能の強化（道路の新設、拡幅、交差点改良等）や相鉄線瀬谷駅を起点とした新たな交通（中量軌道等）の導入を含めた多様な交通手段を検討。

### ■横浜市の今後の取組

#### 《「コミュニケーション戦略」の策定等》

令和2年度に、国際園芸博覧会に関する広報PR、機運醸成、市民協働を柱とした「コミュニケーション戦略」を策定するとともに、全国的な誘致推進組織を設立予定。



#### 《「博覧会基本計画」の策定に向けた検討等》

「博覧会基本計画」の策定に向け、引き続き、国際園芸博覧会の事業展開、事業構成等の検討を進めるとともに、関係者と調整を図りつつ、会場整備に向けた準備を着実に推進。

## 5

# 今後の取組 について

2027 年の国際園芸博覧会の実現に向けては、国は AIPH に対する政府レターの送付とともに BIE に対し国際博覧会としての承認のための手続きを実施していくことが想定される。また、横浜市においては AIPH に対し毎年度の進捗状況の報告が求められてゆくこととなる。また、事業展開の具体化、実施組織の設立、参加国の招致、機運の醸成等を着実に進めるとともに、博覧会の基本計画の策定に向けて幅広い意見をふまえながら連携して進めていくことが必要である。特に博覧会の成功には幅広い市民、また国民のサポートが不可欠であることから、横浜が有する市民力を活かしつつ市民や企業の主体的な参画で自分から参加したい、と思わせる人々を巻き込む仕掛けや、海外から出展したいと思ってもらえるような提案が必要となる。その際、メインテーマである「幸せをつくる明日の風景」を実現するため、花と緑、そして農が都市のくらしと、どう関わっていくのかについて、協議会的な場を設けて幅広く検討し、アウトプットするとともに、レガシーとして活用することも考えられる。

2025 年に開催される大阪・関西万博と相乗的な効果を発揮するよう緊密な連携への十分な配慮や技術革新等の社会情勢の変化に応じ、柔軟に計画内容を見直していくことも必要である。

また、博覧会のための組織については、オランダ等の国際園芸博覧会の先進事例も参考とし、将来のまちづくりを見据えた体制を構築するとともに、開催までのプロセスにおいても博覧会の開催意義を広め・深めるための取組やレガシーを旧上瀬谷通信施設において継承していくことを考慮に入れ、新しい時代にふさわしい博覧会のあり方を検討することが重要である。